

# 庭野平和財団 平成20年度最終報告書

コード番号:08-A-051

## 1. 活動の背景と目的

当団体は1997年より紛争や病気・事故などで障害者の多かったルワンダ共和国に義肢製作所を設け、義肢装具の製作と配布を無償で行い、また自立のための職業訓練や、障害者スポーツの普及などを行ってきた。活動を開始して数年後、ルワンダの隣国ブルンジからの障害者が多く訪れるようになったため、彼らに対し聞き取り調査を行った結果、ブルンジには義肢装具を製作している適当な場所がなく、ほとんどの上下肢障害者は義肢装具を持たず、また杖も木を切っただけの棒で代用しているということであった。両下肢に障害を持っている人は、車いすを利用することもなく、地面を這って移動する姿をしばしば見かける。障害者の多くは、定期的な収入もなく、家族に生活を頼っていたり、町で物乞いをして、日銭を稼いでいたりする。

ブルンジはルワンダと同様、植民地政策によってもたらされた民族対立が続いており、そのため敷設された地雷の被害に遭う人や、紛争に巻き込まれ手足を失う人が非常に多く、また医療の不足からポリオや事故で上下肢が不自由な人も多い。一部の政府関係の障害者は、政府の予算と使って外国に義肢を作りに行くケースもあるが、一般の障害者は手に入れることができず、厳しい生活を強いられている。前述のようにブルンジには義肢製作所がなかったため(以前はロータリークラブの支援で義肢製作を行っていたようだが、運営体制が悪く、その支援も中断されたままである)、ブルンジの障害者は国境を越えて、ルワンダの当義肢製作所に義肢を求めてやってきたが、彼らの経済的負担も多く(交通費・宿泊費など)、ブルンジの障害者のために義肢製作所を開いてほしいという声がとても多かった。

義肢装具を装着することによって、彼らの生活が改善されることは必至で、上下肢障害者が自立をするために、それらは欠かせず、ルワンダとブルンジは距離的にも非常に近く(車で約半日)、またルワンダと似通った言語と文化を持っているため、ブルンジに義肢製作所を開き、義肢製作をすることは可能であると判断し、今回の案に至った。2007年9月に正式に首都ブジュンブラに義肢製作所を開き、活動を進めている。

## 2. 活動の方法と内容・経過など

対象地域: ブルンジ共和国

ブルンジ共和国首都ブジュンブラ市にある当団体の運営する義肢製作所において、上下肢に障害を持つ障害者に対し、義肢装具・杖・車いすなどの製作と配布を行った。

義肢製作は年間を通して行われたが、2009年5月からブルンジ政府の要求により、地方の障害者を訪ねる巡回診療も開始し、彼らに対しても義肢装具の製作・配布を行った。ほぼ1カ月をかけて、ブルンジ国内の各県を回り、障害者の状況を調査すると共に、義肢装具を必要としている人たちのデータを聞き取り、同時に義肢製作も進めた。第一回目の巡回診療は、現在も進行形であり、第二回目の巡回診療を年末乃至年明けに予定している。

作業は月曜日から金曜日、午前8時から5時(途中2時間の休憩)のスケジュールで行われたが、必要に応じて土日も作業を続けた。スタッフの体制は以下のとおりである。

代表	1名(兼ルワンダ事務所代表、運営管理・交渉・渉外)
副代表	1名(兼日本事務所代表、兼ルワンダ事務所副代表、兼義肢装具士、代表補佐、運営管理)
義肢装具士	5名(うち4名はルワンダ事務所の義肢装具士を派遣した)
受付け(ソーシャルワーカー)	1名(来所する障害者の受付けとカウンセリング)
事務・会計	1名(会計管理・データ管理など)
倉庫管理	1名(義肢材料の管理など)
セキュリティー兼清掃	3名(昼夜の警備と清掃)

義肢装具士のうち2名は日本で義肢製作技術指導を受けた技術者であり、ブルンジで義肢製作の指導も行っている。

具体的な義肢製作の方法は:

#### ①受付け・型取り

訪れた障害者のデータ(氏名・生年月日・住所・職業・家族構成・障害を負った理由や時期・必要とされる義肢装具の種類など)を聞き取り、カルテにまとめ、義肢装具士によって障害のある部分を石膏包帯・メジャーによる採寸を行う。採寸後、取った型の陽性モデルを作り、製作を開始する。プラスチックパイプを使って、断端部を入れるソケットを作るのだが、パイプを加工するためのオープンがブルンジにはまだないため、その作業はルワンダの義肢製作所に持ち込んで行った。その後、関節部品や足部などを取り付け、仮合わせの準備をする。大体仮合わせをするまでに、1~2週間を必要とした。

#### ②仮合わせ

途中まで出来上がった義足を、実際に障害者に履いてもらい、具合を確かめる。この時に適合していない部分の微調整を行うと共に、歩行訓練と義肢装具の日々の手入れの仕方などを教えた。仮合わせ後、仕上げに取り掛かる。障害の度合いによっては、仮合わせに数日かかったこともあった。

#### ③配布

出来上がった義足の配布を行う。その際障害者に、義足の仕上がり具合と、当団体のサービスについてインタビューを行う。また今後必要とされる支援についても質問した。

年間を通して(巡回診療も含め)約700人の障害者が当義肢製作所を訪れたが、実際に援助できたのはその20パーセントだった。

義肢製作作業は、5人の義肢装具士によって行われた。そのうち一人はブルンジの靴を専門に製作する職人であるが、その他はルワンダの当団体の義肢製作所で働いている義肢装具士によって進められた。ルワンダの義肢装具士のうち2人は日本で義肢製作の技術研修を受け、現在ブルンジで義肢製作技術習得を希望する人たちにトレーニングを行っている。また義肢装具士のうち4人と受付け・事務担当は障害を持っている。ブルンジ・ルワンダ両国において、障害を持つ人たちが就職することが難しいことから、障害者の雇用に努めている。

基本的には義肢装具・杖・車いすは無償で配布した。無償で配布することに抵抗を感じることもあるが、現実的には障害者のうち定期的収入のある人は非常に少なく、彼らから義肢装具製作にかかった費用を徴収することは困難である。しかしながら、製作した義肢装具が壊れた、あるいはすでに持っている義肢装具の修理にかかった費用は、材料費とそれにかかる人件費を請求した。

2009年1月には、義肢装具を配布する際に、ブルンジの政府関係者が訪れ、障害者の具体的な意見を聞き取っていた。これをきっかけに、今後義肢装具を配布する際は、必ずブルンジの政府関係者が立ち会うようになった。ブルンジの政府とはパートナーシップを結んでおり、今後も政府と共に、障害者支援の方法などを話し合う予定である。

配布する対象者は特に選ばず、社会的に自立する可能性の高い人から優先的に作った。例えば一家の担い手となる人であったり、年齢的に若い人たちである。またブルンジでは民族による対立が起きていることから、民族によって配布の優先順位をつけたりすることは避けた。本来であれば、子供たちの義足を作ることも望んでいるが、子供は成長も早く、来年にはまた新しく義足を作りなおさなくてはならないケースもあり、限りある予算から一人の子供のために毎年義足を作ることはできないため、残念ではあるが今年度は子供の義足は1本しか作らなかった。

義肢装具を作るための主な材料は、ブルンジでは入手が困難なため、協力関係を結んでいるケニアの団体を通して材料を購入した。ケニアでそろえた主な材料は、プラスチックパイプ・関節部品・義足足部・石膏・靴を作るためのリベット類などである。皮革・石膏包帯などはルワンダで購入し、杖を作るための鉄パイプ・鉄板などはブルンジで購入した。ケニアで購入した材料は、公共の交通手段を使ってウガンダ・ルワンダを経由し、ブルンジまで輸送した。通常はブルンジに輸入される品物については税金がかかってしまうのだが、政府の便宜により、それらの税金を免除してもらうことができた。今後ブルンジでもこれらの材料が手に入るようになれば、輸送にかかる費用を節約していくことができるが、ブルンジの発展の具合をみると、まだ先のことになりそうである。

杖は全てローカルの材料を利用し、溶接加工した。杖の先となる部分は、木を削り、古タイヤを張り付け、滑り止めとした。鉄パイプを使ったため、日本で使っている杖のような軽さはないが、丈夫で長持ちし、ブルンジの道路事情に適している。また壊れた際に、ブルンジ国内で修理できるという点でも、現地の材料を使うということが好ましい。

車いすについては、ブルンジで製作したり、購入できる場所がないため、日本で集めた中古の車いすを配布した。しかしながら日本からの輸送費は非常に高く(40フィートコンテナ1本、約180万円)、ケニア・ルワンダでは車いすを入手することが可能であるため、今後はそこで購入しブルンジに持っていくことも検討している。

また義足を履いた人たちにさらに喜んでもらうよう、日本の子供たちが集めてくれた靴と一緒に配布した。それらの靴の多くは、学校で履いた体育館履きであったり、家族に声をかけて集めた中古の靴であったが、中には今まで靴を履いたことがない障害者もあり、義足よりも靴に対して喜んだ人たちもいて、少々複雑な気持ちだった。

巡回診療の際は、ラジオアナウンスを通じて日程・場所などを伝え、多い場所では100人以上の障害者たちが集まった。また首都ブジュンブラから遠い県の場合、その都度首都に戻ってくることが大変なことから、数日間途中途中で宿泊し、複数の県を一度に訪ねた。ラジオアナウンスの際に、目的を伝えていたのだが、人によっては資金の援助があると勘違いしていたり、また就職のあっせんだと思い、履歴書を持ってきた人たちなどもあった。訪れた障害者たち全てのデータを集めたので、今後の資料としてまとめていきたい。

巡回診療は5月に障害者の受付と型取りを行い、2009年9月現在、仮合わせと配布を行っている最中である。10月中旬には製作した全ての障害者に対して配布が終わる予定である。

### 3. 活動の成果

2008年8月から2009年7月までに、159人の上下肢障害者に対し、義肢装具・杖の製作と配布をすることができた。そのうち49人は巡回診療による障害者たちである。細かい内訳は以下のとおりである。

大腿義足:	35本
下腿義足:	83本
装具:	29本
杖:	147対
車いす:	12台

\*注:大腿義足:膝上の義足、下腿義足:膝下の義足、装具:ポリオなどで障害を負った人たちが装着するもの

今回義肢装具を配布した全ての障害者に対し、杖を配布したが、理由としては義肢装具を脱いだ際に、杖が必要となるからである。

車いすは在庫が少なかつたため、配布の数が少なかったが、実際には200人以上の障害者が車いすを必要としていた。その中には下肢障害者だけでなく、知的障害の子供たちも多くいた。それら知的障害の子供たちは、首が座っていないことも多く、世話をする親の負担は大変なものである。それ故、今後はもっとたくさんの車いすを集め、配布できるようにしたい。

配布した障害者の多くは、それまでに義肢装具を装着したことのない障害者たちで、仮合わせ・配布をする際に、数日の歩行訓練を要したが、ほとんどの障害者は上手に歩けるようになった。

ブルンジには義肢装具を製作する場所がなかったため、当団体が活動を開始するとともに、たくさんの障害者が当団体の義肢製作所を訪れるようになり、非常に忙しい日々であった。非常にたくさんの障害者が義肢装具などを必要としているが、あまりにもその数が多いため、全ての障害者に義肢装具を配布することができるのは、まだ遠い先のこととなりそうである。しかしながら、障害者が義肢製作所を訪れた際には、必ず一人一人のデータを取るようになっているため、今後具体的にどのような材料が必要になるか、またどの位の材料が必要になるか把握していくことができる。

義肢装具を手に入れた障害者たちは、非常に喜んでおり、また大切に思ってくれているようで、手に入れても装着して帰らず、大事に抱えて帰る人も多かった。

義足を手に入れた障害者たちに今後希望することの聞き取り調査を行ったが、大多数は仕事を見つけることを目的としていた。ブルンジの人口の多くは農業に携わっており、義足を履いて再び農業を行いたいと語る人が目立った。都市部にいる障害者の多くは、就職を希望しているが、現実的には健常者でも仕事を見つけることが難しいため、技術を持たない障害者が就職できる可能性は低いと思われる。そのため、今後は義肢装具の配布とともに、職業訓練を進めていきたい。

義肢装具を配布して、一番目立った効果としては、障害者自身の意識が変わったことだと思う。今まで町で物乞いをしていた両足切断の男性に義足を配布したが、現在は物乞いを止め、毎日のように当義肢製作所を訪れ、義肢製作作業を眺めている。場合によっては、義肢装具士見習いとして雇用することも考えている。今まで社会から離れて孤立していた障害者が、人と出会い、交流を持つことによって、自分自身が存在する意味を確かめるようになり、社会参加に対し積極的になった。特に目立ったのは、障害者であったため、家庭を築くことを拒んでいた人たちが、人生の伴侶を得て、家族と暮らしていることである。人として一番自然な要求が、義足を履くことによってかなえられたと思っても間違いはない。大げさな表現かもしれないが、人間としての自信をつけたというように

思える。また今まで障害者ということで我慢してきたことに対し、自分自身の意見を言うようになった。残念ながら、現時点で障害者が直接政府に障害者の権利を訴えられるような機会は設けられていないが、当団体を通して政府に彼らの意見を伝えていくことは、今後十分可能である。

またブルンジの国としての大きな変化は、今まで障害者問題に対し消極的だった政府が、段々と目を向けてきたことである。ルワンダで活動を始めた当初も、政府の関心は薄かったが、少しずつ障害者に対する認識も変わり、国会議員に必ず一人障害者の議員を置くこと、また駐車場や公共施設に障害者のための設備を設置することなど、変化が見られた。今後ブルンジでも同様の変化が期待できる。

ブルンジで義肢製作を教えていたルワンダの義肢装具士1名が、8月から来年3月まで日本で義肢製作研修を受けている。今回の研修員で5人目で、今後彼らによる義肢製作指導がより充実していくことを希望している。

#### 4. 今後の課題

義肢装具製作活動については、今後も同様に続けていく。またブルンジ政府より、NGOの認可を今後3年間受けているため、その間は少なくとも活動を続けていくが、団体としてはそれ以後も義足製作活動以外に、長期的な障害者支援の活動を継続していくことを望んでいる。

ブルンジは慢性的な就職難で、健常者・障害者を問わず、常に当団体に対して職を求めている人たちが来る。しかし多くは手に技術を持たないため、他で単純な肉体労働をするに留まっている。今後障害者たちが自立していくためには、技術の習得が必要となり、彼らに対し職業訓練を行うことが求められている。義肢製作技術を教えることは基より、溶接作業・ブルンジの民芸品の加工・また今後都市部で必要となるであろうコンピューター技術などを教えたいと考えている。しかしながら、職業訓練を行うためには、さらに資金・場所などが必要になってくるため、現在当団体の持っている力だけでは不十分で、これらを実行するためには、政府からの協力がさらに必要となってくる。

ルワンダでも起こり得たことだが、義足を履いた障害者たちが、結局仕事に就くことができず、義足を脱いで、また町で物乞いを繰り返していたということがあり、ブルンジではそのようなことをなくすため、定期的に障害者の意見を聞き取る機会を持ち、常に必要とされている支援は何であるかということスタッフとともに考えていきたい。

ブルンジの義肢製作所には、まだ十分な機械類が設置されていないため、作業の立て込んだときはルワンダの義肢製作所に持ち込んで進めていた。しかしながら時間のロス、また交通費などもかかってしまうため、今後は少しずつブルンジの義肢製作所に機械類を増やしていき、独立して作業が進められるように努めたい。最初に必要となるのが、プラスチックパイプを加工するためのオーブンであるが、ブルンジ・ルワンダでは手に入らず、現在ルワンダで使っているオーブンは、ケニアで購入したものである。来年度、ケニアに材料の買い出しに行った時に、値段・仕様などを調査したい。

また活動がブルンジのスタッフによって進められるよう、来年度はスタッフの育成に力を入れなくてはいけない。義肢製作そのものについては、ルワンダ・ブルンジの義肢装具士によって、大分進められるようになったが、材料の管理についてはまだ甘い部分があり、無駄な材料の使い方をしたり、材料がなくなってから探し出すということが頻繁にあった。それらをなくすために、倉庫管理のスタッフを1名配置し、大切に管理するようにした。しかしながら急ぎの場合、必要な書類に記入せず、材料を取り出したり、実際残っているべき数より多かたりして、きちんと管理されているとは言い難

い。また会計についても、帳簿のミスがあったり、何日分かをまとめて帳簿をつけたりしているので、これらも改善していかななくてはならない。

義肢製作については、現在ルワンダの義肢装具士が中心となり、作業を進めているが、今後はブルンジの義肢装具士を育成し、わざわざルワンダから義肢装具士を連れてこなくても活動が続けられるようにしたい。

ブルンジで活動を開始した当時は、ほとんどすべての事務仕事は手書きであったり、計算も電卓を利用していたので、間違いも多かった。それを改善するために、パソコンを導入し、データの管理や、帳簿などをパソコンにインプットするようにしたが、残念なことに2カ月もしないうちに壊されてしまい、また最初の方法に戻ってしまった。ブルンジで活動をして感じたことだが、物を大切にする、壊れないように使うという意識が薄く、パソコンに限らず、義肢製作に必要な機械・工具類なども何度となく修理をした。これは恐らく仕事に対する基本的な責任感が、残念ながら日本より薄いのではないかと思う。それらを改善するために、仕事に対する精神的な姿勢についても少しずつ教えていきたい。前述のように、物を大切にする・節約をするということは基より、仕事時間中の態度なども伝えなくてはならないことがたくさんある。例えば遅刻に対する意識、工作中的の私用電話、工作中に友人が訪ねてくることなどである。

今年度は159人の障害者に対し、義肢装具などの配布を行ったが、来年度はさらに多くの障害者に義肢装具を提供できるよう、資金繰りについても充実していきたい。現在、ブルンジ政府に資金援助の申請をしている。政府に義足代の60パーセントを負担してもらい、40パーセントを当団体で負担するよう、交渉を進めている。60パーセント負担してもらうことにより、さらに多くの義足を障害者に作ることができるようになるので、来年度この交渉が成り立つことを望んでいる。